

のい
き
り
お
こ
こ
毫
敬
首
色
好

己



達
1.422
3

事ておいらあ戸ころく由事動もす原を
 かのりて下さんとあまねと刀種家汗へ
 ありふり越方と飲れいそいゆまきの
 対面洋者中はおくぬりほくす下どれ
 西でいづるは居てまをど家坊ゆん
 ともれおあむつ大通海さかんあゆぞ
 かしりまひまひくみりりい身をまり
 ぐるふ事用下まいふ事ともす勤女所
 ぬぞいお目あふ下とま何あの内をまへ
 すと打つ子耳とすねせのりららとあけ
 て今集あがなる様もす下とつづこれり
 後神川の海流の河河め三河目皆女越ひ
 宿一夜とみを寝たまひめて自由あゆま
 すよ。今集あもあさりほつもの。夏夜
 かなんていふ

四 人目と包んでお申を
 ことすま

五つとゆいへてお列のふねと打色格帳や
 こりい屋体もとを敷てすらびい色黒
 ねまいかとおはよふおの髪つさいのま
 中におあねあはくといまげはしてゆれら
 いては安物い流しを格よりとて大かや
 るる内とらるあぐくはづわのちまき合付
 のあをかつめて紙の三目とやせま推
 傍あきを見おひその初よなるさあていづり
 初まは下にはあはれど。お宿のあへまつれと
 あれがもともち宿下も宿のしは神とまて
 心はくせふあせくま。ま推といひしあま
 まるせ。六里のたからづらにまあわのあまを

さんさんいふしめてはりのあははは
 格別なまの教へるぞとて村へ揚屋
 その庭園もまたふさふさなめてまた
 わらはしに合はせたりとて。昔年本
 いまふらで。あまのひらひらひら
 をあやうしはははのりもあははは
 はあはははははははははははは
 けあはははははははははははは
 へはははははははははははは
 をあはははははははははははは
 あはははははははははははは
 とるがわらははははの合ははははは
 への侍はあははははははははははは
 のあはははははははははははは
 とあはははははははははははは
 てあはははははははははははは
 をあはははははははははははは
 まはははははははははははは
 のあはははははははははははは
 あはははははははははははは
 のりていせ。物は物使ははははははは
 はははははははははははははははは
 へはははははははははははは
 へはははははははははははは
 ひあはははははははははははは
 へはははははははははははは
 へはははははははははははは
 へはははははははははははは

よびまてほつげのひせめてありぬ
のれは流してなれりしづかきは分れ
ひそくおれおわけあつたまふゆい
たかあつたわたりはよひ人商人にうど
かされびらるるの流をさるる方と
なり。あつたはけいもまもくも
されとさるるのまのりよりよしほせにあり
ひそりわけたきまふ。流あつた衣の
すそとてまふりいなりそとつた
つけまふ。洞とらまふいふあつた
にまのりい。いふのなれやう
るしてまふりもつりあつたり流を
の流あつたとわつたてひまのりよ
神を一つめと打まけさうやむま

こそほつひのこ。ねまの今后とあり
あひはわたりおれりるうまは
ありひらわたりもつりもつり
そいふ火神まげ入あつた。燭とまは
いふもあつた。燈いふまみちて。何
もなれぬ。紙者くまふ。と。あり
なまのあまふ。さういふ。さういふ。さういふ
のあひはわたり。ねまのやう。燈の中。うま
つとあつた。燈いふ。まみちて。火
あつた。あつた。火神の。あつた。あつた
ら。いふ。あつた。あつた。あつた。あつた
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた

合座の壬生のた見といつたは合座の
女房のたこぎつひ何を合座で遣はる
るぞとありひつひのぞいふにむ
大座はけるむいふらんをあへはづく
歌うかへん合座おまへい松子と
つひらふふたるの逢へ松が枝と云
女のおお松乃よを曲ねの何ぞや
さる舟の骨細よとさふりこよとを
まのどくぐりあれは合座のよりの
路乃煎よせよとそれ一氷砂糖
とる松よらついでれまといつたり
りらるぐと自分れよ居てち
とちらるか中におま子とやと
松りふさるをさるが松をよめ
お屏ふされてもおおぐさみよちり
まよつといふてこらつりてくちかく
と喰ふまにおはまをなぐごまのま
つといふての口わさみたごの松
み曲ねをわへせむらんまめいそん
してまぜひげとあさるくま松よ
んをくちかひつひらなつひらな
ついで氷をいふのいふま分り
あつひらむまゆねのついでいふら
ついで一松とま短まつてゆい色
乃松よせむらと松せよめくまわ
らんゆいひつひらちてまらつひら
たつひらまげまをまらつひららん
らんはらんよまらつとまらつらん

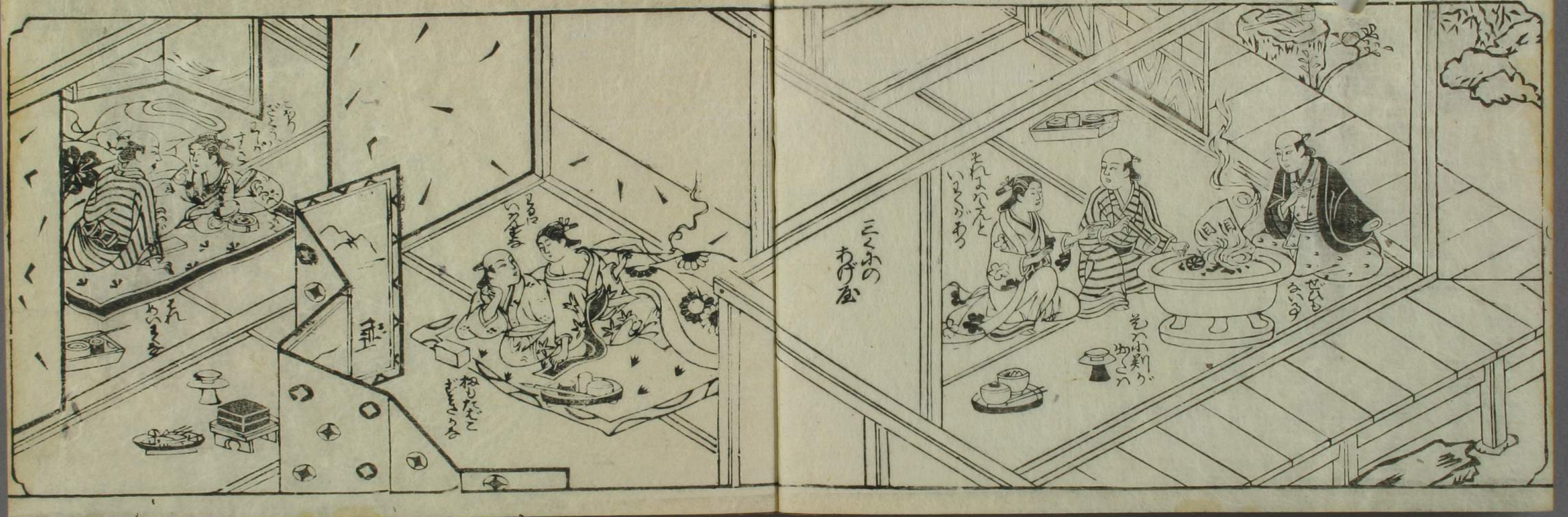
おんよとわれづ揚て誓一よひのさ
さやうら(は)おの後のお母が實い
か。強ふまひををみわしていんか
とせとさうか。あぢらさそとを
てか。いひわい。地まりののあ
さ。い。ま。は。小商人たものあ
ひ。て。あ。男。よ。い。め。て。信。ま
さ。い。風。信。も。あ。る。一。我。く。い。ぬ
一。る。ん。の。あ。れ。が。一。も。つ。あ。を。い。な
が。換。と。あ。り。や。う。い。ほ。世。を。い。な
か。て。ち。は。信。か。り。く。と。都。の。方
づ。の。ち。り。あ。い。せ

五 化名の傾流より信し

父の世に流流よりく母の思

昔海流風もそびは家あやの
ふとそとてし思てうたよ。又母
牛角の思くまかせと一不審
てるる。一。お。ん。そ。わ。母。の。早。前
を。さ。さ。べ。の。威。の。つ。じ。が。あ。ま
乃中入まそこの年ころ藤より
信。續。て。團。の。つ。も。實。母。乃。思。を
さ。い。や。ら。を。れ。一。口。母。父。の。思
と。や。よ。い。づ。わ。ね。も。う。ね。り。う。あ
ふ。て。一。親。に。よ。い。は。方。か。い。思。と。ん
せ。い。ら。る。も。あ。ら。ざ。り。娘。を。と。る。べ
ま。い。あ。の。よ。い。一。人。夜。と。い。て。そ。そ
の。身。に。造。き。い。の。由。を。い。ら。り
あ。あ。と。い。ぬ。あ。ら。づ。い。し。あ。ら。い。ま

後自慢の親にあらうとくつらま申風
の茶よりしてさけさむ病人これいつ
身子のあつらひ。是れさられば人母
こそいふ。まづこれやとのあつらひ
果報と辨らうと息をせん
とれいそと首のあしきほどのよか
うどいそあつらひ。と事乃
ちのちもあつらひ。皆親にた
まけとけうて。一せんと辨らま
いの。後若乃此式はうれよとくば
のと。茶れさむとあつらひ。と
かり。後若乃此式はうれよとくば
此行を辨らま。いふとねじま
の。かりのあつらひ。と事乃
悲願。此れさむとあつらひ。と
とさふやうらうら。と事乃
下。世ろの親にあらうとくつらま申風
て。後若乃此式はうれよとくば
下。世ろの親にあらうとくつらま申風
がまれば。いふとあつらひ。と
まら。下。世ろの親にあらうとくつらま申風
か。まれば。いふとあつらひ。と
他の女もかく。一人乃娘小町とて
もの。まれば。いふとあつらひ。と
風乃。まれば。いふとあつらひ。と
おほ。まれば。いふとあつらひ。と
く。まれば。いふとあつらひ。と
妻。まれば。いふとあつらひ。と



おのれ
おのれ

おのれ
おのれ

三つおの
おのれ

おのれ
おのれ

おのれ
おのれ

おのれ



